

地域における障がい者のためのスポーツ環境

- 日本の障がい者のためのスポーツ振興と地域の取り組み -

丸 野 奈 央*

皆さん、こんにちは。鹿児島県身体障害者福祉協会、鹿児島県障害者自立交流センターで企画係長をしております丸野と申します。企画係長というのは名ばかりで、現場で知的障がいを持つ方たちと一緒にバスケットボールをしたり、バドミントンを一緒にしたりとか、いろいろな教室を受け持って、現場と一緒に運動をするほうが好きなのでそちらのほうの仕事をメインでやっております。県の障害者スポーツ大会というのが毎年ありますけども、その事務局もやっておりますので福祉関係の方で拝見させていただいたことのある方たちが今日はたくさんいらっしゃっています。今日はよろしく願いいたします。座って、失礼いたします。

先ほど北村先生のほうからもお話にありましたけれども、今年の夏に開催されたリオパラリンピックで、4年前の لندنパラリンピックに比べると大きくメディアでの対応が変わったなとすごく印象深く思っております。2020年に控えた東京オリンピック・パラリンピックの影響がすごく強いのではないかなというのは感じております。今までNHKでパラリンピックの結果報告はあってもライブで試合を応援するというのはなかなかなくて、車いすバスケットだったりとかポッチャだったりとか、皆さん夜中も見られた方たちがいっぱいいらっしゃったのではないかなと思います。すごくうれしい変化だなと感じていました。紅白歌合戦に辻沙絵という生まれつき奇形の、手のない陸上の選手が出演して、そういう人たちが大きくメディアに取り上げられて出ていくということは、本当に日本全体が障がい者スポーツに興味関心を持つようになった第一歩かなと思っております。一方で、そういう障がい者スポーツの理解をして普及をしましょうと言いつつも、車いすの方が近くにある体育館ですとか公民館とかでバスケットしたいなと思って行っても、例えば段差があって体育館が使えないとか、トイレの問題があるとか、スロープをつけていただいてもそのスロープの角度が強すぎて登りにくかったり、なかなか車い

すの人たちにとって不便なんだよという声も聞いたりします。やはりハード面・ソフト面でまだバリアフリー化というのは進んでないのかなというのが現状の課題として思っております。

私が勤めているハートピアかごしまは鹿児島市の北部にありまして、そこに地域の障害者の方ですとか、「小学校にあがるので就学前健診で療育手帳を取ることになったんです。うちの子、何かスポーツできませんかね」みたいな感じで来られる方がたくさんいます。そういう方がいらっしゃったときには、私たち指導員が対応して、「じゃあ、水泳教室いついつあるので来てみましょうか」とか「バドミントン教室にぜひ入ってください」という感じで、それこそ障がい者スポーツという面では、ハートピアに来ていただけたら比較的長く楽しみながら、そして競技性もより高くいろいろ関わっていただけますけれども、鹿児島は離島も抱えていますし、「ハートピア行きたいんだけど何時間もかかるんだよね」と言われる声もたくさん聞いています。なので、どこに行ったらそういうスポーツに出会えるのか。近くの総合型地域スポーツクラブだったりいろいろな体育館とかでそういったイベントがやっている、そういう所に障がい者の方たちが来たときに受け入れが可能なかという情報の提供が一番の課題かなと思っております。

まだ本題には入らないのですが、ハートピアで私がおう15年ぐらいになりますけれども、車いすバスケットのヘッドコーチをしていた時代があります。漫画で『リアル』というのがありますが、そのときに高校生の男の子が来て、「あの、来週、僕、足切断するんです。『リアル』っていう漫画見て、俺と一緒にんで車いすバスケ、俺やりたいんす」と言ってきたんです。そういう若い男の子が「来週、足切断するんです」と来て、彼のハートピアまで来る強い気持ちというのに私も強く心を打たれて「そうなんだ。だったらもう、退院したら必ずハートピアにおいて。バスケ車に乗せ

*社会福祉法人鹿児島県身体障害者福祉協会 鹿児島県障害者自立交流センター

てあげるよ」と言って、それから2カ月後、3カ月後ぐらいに、彼が「足切りました」と言ってきました。やはり精神的にも強い子だったのでかなり明るく来て、「バスケット車乗りたい」と言って、「それを楽しみに手術や経過も頑張ってリハビリもしたんだ」という話を聞きました。その時、私は障がい者スポーツに関わって良かったなと思いました。彼は、もともとバレーボールをやっていたので、運動神経も良かったので、今は「薩摩ぼっけもん」という車いすバスケのチームのエースをしながら、その車いすバスケで出会った看護師さんと結婚をして、今2人の子供のパパをやっています。シンという名前の子ですけれども、2、3日前も会って、今日こういった会議があるので、「そこでちょっとシンの話していい？」と言ったら、「ああ、いいよ、いいよ。いっぱい言ってきて」と言われたのでちょっとお話をさせていただきました。そういうふうに、障がい者になってしまったけれども何かやりたいと思う子たちがすぐ行ける場というのが各地域にあれば、障がい者スポーツがどんどん発展して行けるのではないかなと思いました。私たちも具体的に地域で県から委託事業としていろいろな事業を進めていますので、その辺もお話しながら本題に入っていきたいと思います。

障がい者スポーツの歴史と役割です。もう皆さんご存じの方もいらっしゃると思いますが、もともと第二次世界大戦後にリハビリテーションのスポーツとして始まりました。リハビリばかりではなかなか難しいところを、車いすバスケをさせたり車いすの方に運動をさせたり、このストックマンデビル病院というところで障がい者スポーツに取り組んだところ、社会復帰の率が倍以上に増加したそうです。それで障がい者にスポーツをさせるというのはすごくいいことなのだとということで、グッドマン博士という方が、「だったら、じゃあ大会も始めてみよう」と言ってストックマンデビル大会というのを開催しました。これがのちのパラリンピックにつながっています。1960年のローマオリンピック直後に、同地でパラリンピックが開催されて、今度2020年に東京オリンピック・パラリンピックが来ますが、1964年に東京でパラリンピックがありました。このときが日本の障がい者スポーツを受け入れるきっかけというか発展の契機になっています。大分に太陽の家というところがありますけれども、そこの中村裕先生という方が実際グッドマン博士のところに弟子入りをして障がい者スポーツとはというのを学んだのが

きっかけだと言われております。パラリンピックのパラの部分ですけれども、Paraplegiaという脊髄損傷者とオリンピックの造語でつくられていたものが、Parallelという平行した、なので脊髄損傷者だけではなくて視覚だったり知的だったりパラリンピックに参加する方たちが増えたのでParallelとオリンピックというのを組み合わせてパラリンピックというふうに名前が変わったと言われております。「失った機能を数えるより残った機能を最大限に生かせ」というのは、もう障がい者スポーツではすごく大事なコメントのところですよ。

東京パラリンピックの写真があります。車いすバスケットもその当時は外でやっていたりとか、これはアーチェリーの写真、円盤投げというのがありますけど、写真がたくさん残っていて、今度の東京パラリンピックがどんなふうに華々しく開かれるのかなというのがすごく楽しみなところですよ。

障がい者スポーツの理念です。「障がいのない人はスポーツをしたほうがよいが、障がいのある人はスポーツをしなければならぬ」。やはり健康面とか社会面とかいろいろなところで障がい者スポーツをすることはいいことですよということで普及されてきました。これは大分車いすマラソンのハインツ・フライ選手です。1時間25分で走っています。

日本のスポーツ振興政策ということだったので、障がい者スポーツの発展というところでそれぞれスライドをつくっております。もともとストックマンデビル病院であったようにリハビリの延長上にスポーツがあったということなので、福祉の分野で障がい者スポーツというのは取り扱われていたものが、徐々に2011年のスポーツ基本法、そしてスポーツ基本計画、そして昨年のスポーツ庁設置というところの流れで、厚生労働省が管轄していたところから文科省に移って行きました。国体はもともと文部科学省が管轄していて、国体と同じ開催地で同等の大会をするという全国障害者スポーツ大会については、今まで厚生労働省が管轄していました。それが、長崎大会から文部科学省が管轄するようになって、福祉の分野から一般のスポーツへというような流れがここ何年間で出てきています。今日もいらっしゃると思いますが、鹿児島県は鹿児島県障害福祉課が障がい者スポーツの担当をしております。私たちのセンターの運営事業ですとか、全国障害者スポーツ大会ですとか、いろいろな障がい者のス

スポーツ振興は障害福祉課が管轄しております。ただ、一般のスポーツを管轄している保健体育課だったり体育センターだったり体育協会だったり、そういったところが主催するようなイベントにも、障がい者スポーツが入ってくるのがここ数年でかなり増えてきています。例えば体育センターが毎年体育の日に主催している鴨池陸上競技場で体育の日の開放イベントみたいながありますけど、そこで障がい者スポーツのブースを出させていただいたり、県民レク祭で障がい者スポーツ、ポッチャを紹介させてもらったりというふうに、私も今15年ぐらいこの仕事をしていますけれども15年前からすると比べものにならないぐらい一般のスポーツのほうに入れてもらっているのだなと実感しています。教育委員会が主催する鹿児島県スポーツ推進審議会にも障がい者スポーツの方面からいろいろな意見を言わせていただいたりしています。今はかなり国が動いているので、鹿児島県も障がい者スポーツは福祉ではなくて、一般の競技団体や組織が障がい者スポーツにも取り組もうという動きはなされているようです。

地域での取り組みということですが、私たちの障害者自立交流センターハートピアかごしまは、先ほども申し上げたとおり鹿児島市にありますので、なかなか遠隔地の方たちを対象に事業を展開することができませんので、平成13年から県内を12地区に分けて3年がかりで4地区ずつ回る出前スポーツ教室を展開しています。地域交流スポーツ事業というので各地域に出向いていろいろなスポーツを普及させる・楽しんでもらうというような教室をやっています。これは全部今年行った写真ですけども、鹿屋養護学校は毎年呼んでいただいて、夏休みの授業のところ施設の子たちが集まったり、在校生とか卒業生が集まるイベントに呼んでもらっています。この阿久根市は、今年初めて入ったところだったんですけども、出水養護学校の卒業生が集まって、スポーツだけではなくて文化活動も含めいろいろな活動をしているところで、「お願いしたらハートピアの方、来てくれるんですかね？」みたいな感じで問い合わせをもらって、「ああ、行きますよ」と言って行ったのがこの阿久根市の写真です。南さつま市は、一部しか写っていませんけど毎年150名近く参加する事業です。平成13年に始めたときには出前スポーツ教室を地域で展開しようと思って、「私たち行きますよ」と各市町村の福祉課に連絡を取って「こんな事業をしようと思ってんですけど、障がい

者の方、集めてもらえませんか」とお願いをしても「いや、何をするのか分かんないし」みたいな感じでした。種子島に行ったことがあるんですが、参加者は10人ぐらい集まる予定で言われたので、10人だったらこんなのやろうと考えて職員4名で行ったら、実際にはら2人しかなくて、残りの方たちはみんな当日、ドタキャンじゃないですけども行けなくなりましたと言われて、「もう職員4人で行ったのに対象者2人だったら私たち何のために来たんだらうね」みたいな感じですがすごく自分たちの広報力のなさというのを痛感しました。それから、各市町村の福祉課はもとより体育協会ですとか、いろいろなところに出向いていって、あとは地域の身障協会とか手をつなぐ育成会とか、障がい者の当事者のかたがたの団体があるので、そこに「ぜひこういう事業をやってるんで地域でこうやって教室やりませんか」という感じでお話をさせていただいたところ、南さつま市が「うち、福祉大会やるんで、それに来てくださいよ。そしたらそこでいろいろ障がい者スポーツの体験会をしてください」というのがきっかけで、もう南さつま市はここ10年ぐらい毎年行ってますけれども毎年150人ぐらい参加してくれます。そのうわさを聞きつけて、始良・伊佐地区だったり、いろいろな福祉大会にも呼んでもらって「今年もポッチャ楽しみにしてたよ」とか「卓球バレーやって」みたいな感じで声を掛けていただくようになったので、やっと15年ぐらいかけて安定したこういう事業が取り組めるようになったのかなとは思っています。今年大島にも行きました。大島養護学校とあと龍郷町のりゅうゆう館というところで龍郷町の障がい者の方とか名瀬市の障がい者の方たちが集まってこういった事業を展開しました。ただ、やはり向こうから「来てね」という要望をもらえるようにはなりませんが、実際そこで地域に根付いた活動ができるかということ、まだまだこの事業すら知らない地域もあって、未開拓のところを私たちは少しでも広く回っていきたいなと思ってこの事業を展開しております。ハートピアみたいなハード・ソフトの面のバリアフリー化が進んでいるような建物が、例えば各地域にあれば、もしかしたら障がいスポーツというのは可能かもしれないなと思ってます。ただ、建物を建ててそこに人をつけてというのは難しいので、既存の体育施設だったり公民館だったりということ、あるいはスポーツ推進委員の方だったりボランティアさんとか、そういう人たちが障がい

の特性を理解した指導ができるというソフトの面のバリアフリー化も大事なんじゃないかなと思っております。

すいません。もう15分過ぎそうなんですが、話していきます。

障がい者スポーツの目指すべき未来像と課題ということで、ネットとか見たら出てくる資料と一緒にすけども、やはり一番大事なところはこのハード・ソフトのバリアフリー化、そして今日佐土原スポーツクラブさんが来てますけれども、総合型地域スポーツクラブに障がい者が参加できるような環境づくり、障がい者の受け入れができるような組織づくり、気軽に参加できる場というのが身近にあればいいのかなと思ってます。あとは、健常者・障がい者のスポーツ関係団体とか競技団体の連携強化としましたが、私はいつでも障がい者の方がスポーツを楽しめる環境づくりというのが一番大事なかなと思っています。自分はバスケットボールが専門でずっとやってきましたので、車いすバスケットにずっと関わってきましてけれども、2020年の全国障害者スポーツ大会開催に向けて鹿児島バルダーズという知的障がい者のチームの立ち上げをしました。バルトルという光の神ですけど、彼らは本当に純粹ですごくキラキラ輝いています。なので、北欧神話に出てくるこのバルトルをロゴマークにしてバルダーズというチームをつくりました。今、男子で25名近く、女子が昨年の4月に発足して今15名ぐらいいますが、障害福祉課のアカタニさんのお力添えもあり、九州ブロックに参加できるような段取りができて、男子はもう2年ぐらい参加しているんですけど、女子が今年初出場で沖縄である全国障害者スポーツ大会のブロック予選に参加します。彼らはこのバルダーズに参加する、バスケットするために学校も頑張ります。就職活動も頑張るために、実習も頑張ります。バスケができるように土日が休みの就職先を探します。ということで、スポーツを楽しむために学校頑張る、仕事頑張るというのを合言葉に活動をしているのがこの知的障がい者のバスケットボールのチームです。私も仕事とは少し離れているのでこのバルダーズの活動ばかりやっていると怒られてしまうので仕事も頑張って言われないようにこのバルダーズの活動も頑張るといところで、いつでも楽しめる環境づくりというのが大切なかなと思って私は活動しております。

うまくテーマに沿った話ではなかったと思いますけ

れども、早口で申し訳ありません。以上で報告を終わりたいと思います。ありがとうございました。

北村：では、今のご発表に対しまして松本先生からコメントをいただければと思います。

松本：ありがとうございました。地域における障がい者のスポーツを推進する公の拠点の職員さんという立場での発表に、多くの示唆をいただきました。まず、地域の障がい者のためのスポーツを推進するということですが、この際、“障がい者”とは、どなたを対象としているのでしょうか。また、理念的なことになりますけども“障がい者のための”というのは何を意味しているのでしょうか。あとで皆様方にはディスカッションの折の参考にさせていただければと思いますが、その部分を確認してみたいと思いました。

今、ここには、主に福祉が専門の方とスポーツを専門とされる方がいらっしゃると思いますが、センターはその両方が重なるところにあります。ここでは、主な利用者である障がい者ご自身がそれぞれのメリットを享受できる場所であるはずですが、センターとしてみれば、その方向性というか、障がい者の方からみたスポーツセンター、障害者スポーツ推進の立場からみたセンター、ほかにもあろうかと思いますが、立ち位置は重要になりますね。センターの機能といいますが、役割が問われます。スポーツを通した障がい者福祉の充実、その一つひとつが営みとして反映されなければならないと思います。

発表では、“出前”というかたちで地域に出向いて行ってスポーツを拡げていこうとされている、こういったスポーツ推進の際の障壁を取り除く柔軟なプログラムはとても参考になります。実際に障がい者がスポーツをする際の障壁のひとつに“物理的なハードル”が挙げられています。しかし物理的なハードルだけクリアすればスポーツは推進されるかという点必ずしもそうではありません。他にも制度的、文化・情報、そして意識のハードルがあるといわれています。障がい者を対象としたスポーツ活動に関する調査では「スポーツやレクリエーション活動をする際に障壁がありますか？」との質問に“特にない”とする回答が3～4割あります。それらが意味するところは何なのでしょう。特に障壁がないのに週1回以上の実施者は2割程度です。発表でも“スポーツ推進における障壁は単に

物理的なものだけではない”とおっしゃっていましたが、その部分が、障がい者のスポーツ活動を推進する上で一番の障壁ではないかと感じたところです。このあたりのスポーツニーズの発掘は大きな課題だと思います。障がい者スポーツセンターでは、さまざまに交錯する障壁に対応した営みを同時進行で考えていかなくてはならない。一人でも多くの人と情報を共有し、参画してもらい、どうあるべきなのか、どういう形でスポーツをたのしむのがよいのか、などを一緒に考えていくことができる拠点であると改めて感じました。コメントが長いですね、これぐらいにしておいたほうがよろしいですね。ということで終わらせていただきます。ありがとうございました。

北村：ありがとうございました。今いただいたようなコメントを、またのちほどのディスカッションのところでたたき台にさせていただければと思います。よろしくお願いいいたします。ありがとうございました。

平成28年度 生涯スポーツ実践センター
協力者会議 2017.1.27

地域における障がい者のための スポーツ環境

「日本の障害者スポーツ振興 * 地域の取り組み」

鹿児島県身体障害者福祉協会
鹿児島県障害者自立交流センター
丸野 奈央

1

障害者スポーツの発展

リハビリ延長上にスポーツ＝厚生労働省
↓
競技スポーツ・楽しみの場＝文部科学省及び厚生労働省と連携

2011年8月 スポーツ基本法…障害のある人を含めてすべての国民のスポーツ権が明文化される
「スポーツを通じてすべての人々が幸福で豊かな生活を営むことができる世界」

2012年3月 スポーツ基本計画 策定
国・地方公共団体・スポーツ団体等の関係者が一体となり総合的にスポーツ施策を推進していくための指針
「年齢・性別・障がいの有無などを問わず、広く人々が関心・適性に応じてスポーツに参画できる環境を整備すること」

2015年10月 スポーツ庁設置

障害者スポーツの歴史と役割

- * 第2次世界大戦後
医療・リハビリテーションスポーツとして誕生
- * グッドマン博士の活動 イギリスの神経科医
1944年ストークマンデビル脊髄損傷センター設立
ストークマンデビル大会の開催
第1回夏期パラリンピック 第9回国際ストークマンデビル競技大会として
1960年ローマオリンピック直後に同地で開催
1964年東京パラリンピック→日本の障害者スポーツ発展の契機

名前の由来
当時はParaplegia(脊髄損傷)とOlympicの造語
1988年ソウル大会から
Parallel(並列した、同じ)とOlympicの組合せ
失った機能を数えるな残った機能を最大限に生かせ
by グッドマン博士

地域での取り組み (地域交流スポーツ事業)

鹿屋養護学校 阿久根市 南さつま市
大島養護学校 龍郷町りゅうゆう館

東京パラリンピック1964年

パラリンピック 東京大会報告書より
発行 財団法人 国際身体障害者スポーツ大会運営委員会
発行日 昭和40年8月1日

THE TOKYO GAMES FOR THE PHYSICALLY HANDICAPPED
PARALYMPIC TOKYO 1964

開会式 自転車競技 皮艇 舟艇

障害者スポーツの目指すべき未来像と課題

生涯スポーツの環境が整備された社会

障がいのある人たちが、障がいの種類や程度、ライフステージに応じて身近な地域で一緒に日常的にスポーツを楽しめる
自治体・各地域の障害者スポーツ協会が連携して身近な地域で障がいのあ
るなしに関わらずスポーツを楽しむ機会が必要
総合型地域スポーツクラブへの障害者参加

ハード・ソフトのバリアフリー化
生涯スポーツ・競技スポーツ発展のために…
地域にあるスポーツ施設の使用を容易にすること
地域における障がい者スポーツの指導者を養成してスポーツ施設に
配置する等…スポーツ推進員の協力

スポーツ施策の一元化
健全者・障害者のスポーツ関係団体・競技団体連携強化
小・中学校教育における障がい者スポーツの理解促進

障害者スポーツの理念

「障害のない人はスポーツをした方がよいが、
障害のある人はスポーツをし
なければならない」
Heinz Frei(Swiss)

2009.10.25
第29回大分国際車いすマラソン大会を
1時間25分46秒で制したハインツフライ選手